



わが恋ふる君

この歌は六七一年十二月に天智天皇が崩御した際、姓氏不明の婦人が詠んだ歌です。この歌の前には倭大后の歌が、後には石川夫人、額田王らの歌が並び、「天智天皇挽歌群」とも呼ばれる九首（一四七～一五五番歌）の中の一首です。

題詞には「天皇の崩りましし時に、婦人の作れる歌一首」とありますが、この歌だけを取り出してみると、挽歌（死に関する歌）というより相聞（恋の歌）の要素を強く感じます。

前半では遠く離れている「君」を嘆き、恋い求めています。類似した表現は恋の歌にも見え、例えば大伴家持が恋人の坂上大嬢に贈った長歌には「…うつせみの人にあるわれやな

にすとか一日一夜も離り居て嘆き恋ふらむ…」（現世の人間である私は、どうして一日中も一晩中も、このように離れていて嘆き恋しく思っているのだろうか。／巻八・二六二九番歌）とあります。

また、後半の表現も恋の歌に見え、たとえば坂上大嬢が家持に「玉ならば手にも巻かむをうつせみの世の人なれば手に巻きがたし」（あなたが玉でしたら、手にも巻いて離さずにいましょうものを、現実の世の人

です。ので、手に巻きかねます。／巻四・七二九番歌）と歌うと、家持も玉になってあなたの手に巻かれたいと答えています（巻四・七三四番歌）。今回の挽歌を家持と坂上大嬢が相聞に転用した可能性もありますが、恋の歌にあつて違和感のない歌い方です。また「夢」も万葉集では恋の歌に用いられる例がほとんどです。

今回の歌は「うつせみし神に堪へねば」の冒頭二句で挽歌たりえいと抗えない、寿命に逆らえないと規定しており、「離り居ても単に距離が離れているのではない、死による別離として嘆きが表されています。

この後、壬申の乱が起り、天武天皇が即位します。天武・持統天皇のころから柿本人麻呂が活躍し、数々の挽歌を作つて発展させますが、今回の歌はそれ以前のごく初期の挽歌です。対句が整っていない、たどたどしい歌とも言われますが、「わが恋ふる君」への恋情を繰り返し記すこの歌には率直な魅力があります。作者の名が記されないながらもここに載せられているのは、この歌の力によるのではないかと考えられます。

この相聞のような挽歌からは、対象が生きていても亡くなつていても「恋ふる」気持ちと同じなのだと思感できます。

（本文 万葉文化館 阪口由佳）

訳

生きている身体は神の力にさからえないので、遠く去つてしまつて、朝も私の嘆くあなた、遠く思慕するあなた。もし玉でもあつたら手に纏いてもち、衣だとしたら脱ぐ時もないように私の恋うるあなたは、昨夜の夢に現われて来ました。

婦人 をみなめ
巻二（一五〇番歌）

うつせみし 神に堪へねば
離り居て 朝嘆く君
放り居て わが恋ふる君
玉ならば 手に巻き持ちて
夜ならば 脱く時もなく
わが恋ふる 君そ昨の夜
夢に見えつる

万葉ちゃんのつづやき
和歌や作者などに関連するものを紹介するよ！

なら記紀・万葉名所図会
―壬申の乱編―

日本古代史上最大の戦乱である「壬申の乱」から今年で1350年となるのを機に、『なら記紀・万葉名所図会―壬申の乱編―』を発行しました。気軽に県内の歴史文化資源に触れてもらえるよう、多彩な風景写真や『万葉集』の引用などを掲載し、壬申の乱の「名所」を魅力的に紹介しています。

県文化資源活用課、各市町村観光振興担当課などで無料配布しています。

電子ブック版はこちら▲

問 県文化資源活用課 ☎0742-27-8975

12月号の解説本文2段目の9行目「巻一・一一六番歌」は「巻二・一一六番歌」の誤りでした。お詫びして訂正します。